

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究

Horse-riding Culture and Horse Production in Northeast Asia

2. 研究代表者氏名

諫早 直人

ISAHAYA, Naoto

3. 研究期間

2019 年 04 月 - 2020 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

4世紀の中国東北地方で成立した装飾馬具をともなう騎馬文化は、朝鮮半島を介して日本列島へと伝えられ、古墳時代中・後期の日本列島に定着するとともに、その国家形成にも大きな影響をおよぼした。古墳時代の馬具については多くの研究があり、朝鮮半島や中国東北地方の馬具についても研究が蓄積されつつあるものの、ウマの生産・供給体制についてはウマ自体の遺存例が少ないこともあり研究は遅れている。日本列島における馬匹生産はいわゆる牧との関係で論じられ、文献史料と考古資料との対比にもとづく議論がなされる一方、中国東北地方から朝鮮半島、日本列島へと騎馬の風習が拡大していくなかで、ウマの生産・飼養がどのように変化していったのかという点については、実証的な議論がなされてこなかった。本研究は、こうした問題点に鑑み、匈奴や鮮卑など東方ユーラシアの騎馬文化と比較しつつ、中国東北地方・朝鮮半島・日本列島の騎馬文化と馬匹生産について、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

The horse-riding culture, with its decorative horse trappings, originated in the fourth century in Northeast China, then spread to the Japanese Islands by way of the Korean Peninsula. When, the horse-riding culture subsequently took root in the Japanese Islands during the middle and late Kofun period, it had a substantial impact on the development of the Japanese state. There have been many studies concerning horse trappings of the Kofun period as well as those of the Korean Peninsula and Northeast China. However, few examples of horse (bone) have yet been recovered from excavations. Previous studies of horse breeding in Japan have mostly focused on comparisons between archeological materials and historical

documents. However, whether the breeding of the horses changed during the spread of the horse-riding culture has not been studied before. This study will, therefore, focus on the production and supply of horses in the various horse-riding cultures. This study will help clarify the horse-riding culture and horse breeding of Northeast China, the Korean Peninsula, and the Japanese Islands -based on an examination of archeological materials and historical documents and comparisons with the horse-riding cultures of Eastern Eurasia, such as the Xiongnu and the Xianbei.

5. 本年度の研究実施状況

2019年7月5日(金)に韓国・蔚山博物館より学芸研究士の李炫姫氏を招へいし、第1回の研究集会を開催した。李炫姫氏は韓国出土馬具を中心とした若手の考古学研究者であり、「新羅・加耶の馬文化」と題し、考古資料を中心に文献史料も含めて、古代朝鮮半島南部の馬文化についての総合的な研究成果が報告された。研究班員からは、日本の研究状況との比較、騎馬と馬車の問題、馬と牛の使用状況の比較など、さまざまな視点から意見交換がなされ、有意義な研究集会となった。2019年12月20日(金)には第2回の研究集会を開催し、総合研究大学院大学の菊地大樹氏が「中国古代養馬史の再構築」と題して研究報告をおこなった。菊地氏は中国の馬文化を専門とし、動物考古学的方法による調査・分析・研究を長年にわたって進めてきた。報告では、古典籍・出土文字資料の検討、動物考古学と理化学分析からの古代養馬技術へのアプローチ、近年の遺跡出土馬骨の分析など、さまざまな角度からの研究成果がわかりやすく提示され、それをもとに活発な意見交換がおこなわれた。

6. 研究成果の概要

最終報告書に記載

7. 本年度の研究実施内容

2019-07-05 朝鮮半島の騎馬文化と馬匹生産

新羅・加耶の馬文化 発表者 李炫姫 蔚山博物館

東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究(趣旨説明) 発表者 諫早直人 京都府立大学

2019-12-20 古代中国の馬文化と馬匹生産

中国古代養馬史の再構築 発表者 菊地大樹 総合研究大学院大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

未定

9. 研究班員

所内

岡村秀典、向井佑介、古松崇志、藤井律之、大谷育恵

学内

坂川幸祐(文学研究科)

学外

諫早直人(京都府立大学)、森下章司(大手前大学)、井上直樹(京都府立大学)、中村大介(埼玉大学)、青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所)、片山健太郎(奈良文化財研究所)、金宇大(滋賀県立大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	4 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
学内	1	4 (1)	2 (1)	2 (1)	3 (1)	5 (1)	2 (1)	2 (1)	4 (1)
国立大学	2	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学	3	3 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関	2	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関	1	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他	3	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	14	20	2	2	3	31	2	2	4

		(4)	(1)	(1)	(1)	(5)	(1)	(1)	(1)
--	--	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	11(8)
国際学術誌に掲載された論文数	()

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由			
掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
『ユーラシアの大草原を掘る (アジア遊学 238)』勉誠出版、2019年9月	6	草原の馬具—東方へ与えた影響について	諫早直人
『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集、2019年9月	1	栄山江流域における馬匹生産の受容と展開	諫早直人
『考古学ジャーナル』731、2019年9月	1	馬の流通、馬による交通	諫早直人
『埼玉大学紀要 教養学部』第55巻第1号、2019年10月	1	馬利用に関する近年の研究動向	中村大介
『馬の考古学』雄山閣、2019年11月	4	東アジアにおける馬文化の東方展開	諫早直人

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

13. 次年度の研究実施計画
なし

14. 次年度の経費
なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等
本研究の成果をふまえて、さらに発展させた共同研究A(若手)を来年度新たに実施する
予定である。

